

分娩立ち会い実習における学生の体験と指導のあり方

重西 桂子 岡崎 愉加

要旨 本研究の目的は、分娩立ち会い実習における学生の体験の意味を明らかにし、指導のあり方を検討することである。母性看護学実習において分娩立ち会い実習を行った学生19名を対象にレポートの内容を質的に分析した。学生が感じたことについて自由記載したレポートから、学生の感情に焦点をあて体験をプロセスとしてまとめ、段階を構成した。その結果、学生が援助者として産婦にとってどういう存在であるか問い、意味づけるプロセスが見出された。分娩立ち会い実習における学生の体験のプロセスは、「産婦の援助者になれるかと自問しながらできる限りのことをする決意に至る」「産婦にとっての看護援助を行えているかと自問しながら無我夢中でできることを行う」「いのちの尊さを体感／いのちの誕生の場に存在した人々との一体感」「産婦の援助者になれたという確かな実感」の4段階から成っていた。そして、学生への指導のあり方として、＜学生の緊張を緩和し産婦への興味・関心を大切に作る＞＜産婦との関わりのきっかけを作る＞＜産婦や家族がもつケアニーズを共に模索する＞＜学生の五感を駆使したケアを支援する＞＜産婦に行ったケアとケアがもたらした効果と一緒に意味づけする＞＜感情表出や表現を支援する＞＜対象からのケアの評価をフィードバックする＞ことが必要と考えられた。

キーワード：母性看護、分娩、看護学生、臨地実習、体験

はじめに

母性看護学実習における分娩立ち会い実習は、学生にとって、経験から多くの学びを得たり（長島,2001、Ohno,2001）、出産や育児に対する考え方に影響を与えるなど（鈴木, 2004）、学習としての意味が非常に大きいといわれており、本学の母性看護学実習においても分娩立ち会い実習を行っている。しかし近年、分娩件数の減少に加え、分娩立ち会いの承諾が得られない産婦は増加傾向にあり、すべての学生が分娩立ち会いを経験することが困難な状況となっている。渋谷ら（2005）の調査によると、助産師学生の分娩介助実習を依頼された際に「戸惑いがあった」と回答した産婦は、助産師学生に関する情報が不足しており認識が低かったと報告している。よって、看護学生の分娩立ち会い実習に関しても、受け持ちの依頼の際に学生が分娩立ち会い実習の体験から何を学ぶのか、どのような看護援助を行うかという情報を産婦や家族に伝え、理解を

得ることが必要である。

本研究では、学生が分娩立ち会い実習をどのように体験しているか、その過程を明らかにすることを目的とした。この研究結果は今後、分娩立ち会い実習に臨む学生に対する指導方法を検討するための資料とする。また、母性看護学実習や看護学生という存在に対する一般社会の理解を広めるために役立てる。

I. 研究目的

学生が分娩立ち会い実習をどのように体験しているのか、その体験の意味を明らかにする。

そして、分娩立ち会い実習に臨む学生に対する指導のあり方を検討する。

II. 研究方法および対象

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 対象

対象は、母性看護学実習において分娩立ち会い実習を行った学生23名（3年生～4年生）である。そのうち、分娩室入室時点から受け持った事例、新生児仮死の事例を除いた19名を分析の対象とした。

なお、分娩立ち会い実習とは「分娩室入室前の時点から受け持って看護に参加し、その産婦の分娩に立ち会う」実習のことを指す。

3. データ収集

学生が分娩立ち会い実習後に記述したレポートを質的に分析した。レポートの内容は、分娩立ち会い実習を通して学生が感じたことを自由記載したものである。レポートは、分娩立ち会い実習の翌日～4日後までに記載して提出するよう求め、分娩立ち会い実習を通じて学生が感じたことそのものを捉えられるようにした。

4. 倫理的配慮

学生に研究目的を説明し、記述内容の分析や研究結果をまとめる際には、個人が特定されない形で行うことを約束した。その上で同意が得られた学生のみを対象とした。

5. 分析

個別の分析では、まず分娩立ち会い実習を行う学生の感情や心の動きに焦点をあて、体験の内容とそれに対する学生の感じたことを記述内容から忠実に読みとった。次に、読みとった内容をまとまりにしてネーミングした。そして、それらを分娩立ち会い実習の体験のプロセスとしてまとめた。全体の分析では、全員の体験のプロセスの共通性に着目し、段階としてまとめた。分析した結果は、母性看護学と助産学を専門とし実習指導の経験をもつ研究者と共に繰り返し見直しを行った。

以下に分析の例を示す。生データ“私は今までお産を見たことがなかったので、いざ本番となるとこれからどうなるかと思うのだろうと思い、とても緊張してしまいました”は、「分娩は未知の領域であり、これからどうなるかという緊張を抱いている」と読みとり、類似した内容をまとめて「緊張：これからどうなるか」とネーミングした。そして、ネーミングした内容を整理し各事例の体験のプロセスを構成した。全事例において、この「緊張」は共通の

ものであったため、「分娩という未知の経験からくる緊張」と表現した。

さらに、各事例の全体のプロセスを概観すると、学生の感情の変化の中には、産婦にとって学生がどのような存在であるのか問い続けるプロセスが見出されており、その観点で段階を構成した。

Ⅲ. 結果

分娩立ち会い実習における学生の体験は、学生が産婦にとって援助者として存在しているかどうか問い続け、意味づけるプロセスであった。「産婦の援助者になれるかと自問しながらできる限りのことをする決意に至る」「産婦にとっての看護援助を行えているかと自問しながら無我夢中でできることを行う」「いのちの尊さを体感／いのちの誕生の場に存在した人々との一体感」「産婦の援助者になれたという確かな実感」の大きく4つの段階から成っていた。

図1はそれらの体験を図式化したものである。体験のプロセスは左から右へと変化している。なお、図中の波線は学生の感情の揺れを示している。

1. 産婦の援助者になれるかと自問しながらできる限りのことをする決意に至る

図1の左下に示す「産婦の援助者になれるかと自問しながらできる限りのことをする決意に至る」は、初め学生は自分が産婦に看護援助を提供する人になれるかどうか自信がもてず、緊張と戸惑いのなかに居た。学生は「分娩という未知の経験からくる緊張」と「産婦に対して何ができるかわからないという戸惑い」を感じながらも、矢印の「産婦の助けになりたい」という強い思いに後押しされ、「産婦に対して自分にできる限りのことをする決意」に至っていた。「産婦の助けになりたい」と産婦へ強い関心を寄せることは、緊張のため引き下がりそうになる学生がその場に居続けようと頑張る力の源となっていた。また、学生はその場に居ることで、助産師や産婦自身から「関わりのきっかけをつかむ」ことができており、産婦に関わることで自分が学生に居やすさをもたらしていた。

1) 分娩という未知の経験からくる緊張

学生は、今までに経験したことのない分娩の場にはじめて足を踏み入れる緊張感を感じていた。事例“今までお産を見たことがなかったので、これから

どうになってしまうのだろうと思い緊張した”

2) 産婦に対して何ができるかわからないという戸惑い

学生は自分が「産婦の役に立つことができるか」という戸惑いや自信のなさ、自分の存在や行為が「産婦にどのような影響を与えるかわからない」という懸念を抱いていた。

事例 “いったい私には何ができるだろう、黙って突っ立ったままで終わってしまうのではないか”

事例 “腰をささろうかと思っても、この患者さんは触られるのが嫌なのかもしれないと思い戸惑った”

3) 産婦の助けになりたいという思い

学生は、「産婦に対して援助したい、自分も何かしたい」という強い願いを抱き、それは対象者への関心という形で学生の気持ちのなかにあった。その対象者への強い関心は、緊張で引き下がりそうになる学生がその場に居続けることの原動力となっていた。

事例 “Aさんとご主人が少しでも満足できる出産ができるように援助したいと思った”

事例 “緊張と力不足を感じて・・・（略）・・・引き下がってしまいそうになったが、この場から逃げたくないという思いと、なんだってさせてもらおうという思いが重なった・・・（略）・・・だからその場に居られた”

4) 産婦に対して自分にできる限りのことをする決意

学生は「産婦の助けになりたい」という一心から、自分が考えつくすべてのことを注ぐ決心に至っていた。

事例 “私にできる限りのことは何だってさせてもらおう”

事例 “わからないながらも、自分のできることをしよう”

5) 関わりのきっかけをつかむ

学生は助産師に誘導してもらったり、助産師の行動を真似たり、産婦の言葉を捉えることによって関わりを開始していた。その関わりを手がかりとして次の関わりを行っていた。

事例 “助産師がBさんのお腹に触るよう私の手を誘導してくれた”

事例 “患者さんが要望を言ってくれ、その援助を行えたことがきっかけになり、少しずつ患者さんに関わること

ができるようになった”

2. 産婦にとっての看護援助を行えているかと自問しながら無我夢中でできることを行う

次の段階である「産婦にとっての看護援助を行えているかと自問しながら無我夢中でできることを行う」は、学生自身が行っている行為が産婦にとって看護援助となり得ているか、最初は実感がもてない状況にある。そのため学生は、「産婦に対して自分にできることを行う」と表現していた。学生は無我夢中で産婦に向き合い「できること」を行っているが、産婦への一方向の学生の働きかけは、産婦の反応を見ながら自分にできることを発展させ、下に示す事例のように「産婦のニードに合わせて自分にできることを行う」へと変化していた。さらに、産婦との感覚・感情・行為・場の共有によって、学生は産婦の居る場に身を置き続け、「産婦・家族とともに分娩のプロセスを共有する」ことを行っていた。

1) 産婦に対して自分にできることを行う

学生は今までの習得知識を試すようにして「自分にできること」を開始していた。学生は、産婦に対し自分にできる精一杯のことを無我夢中で行っていた。

事例 “私にできることは何だってさせてもらおうと思ひ、・・・（略）・・・ご主人と一緒に圧迫法を行ったり、できる限りのことをさせてもらった”

事例 “（助産師にすすめられ）わからないながらも自分のできることをしようと考え、声かけを行った”

2) 産婦のニードに合わせて自分にできることを行う

学生は、産婦と関わりながら反応を捉え「自分にできること」を産婦の状態や要求に合わせて工夫して行ない、自分が産婦に向けて実施する行為を発展させていた。そして、看護の個別性を実体験として学んでいた。

事例 “腰部をさすると、Bさんの方から強く押してもらっていいですかと言われた・・・（略）・・・その人に応じた補助動作が行えるよう（その人が望むことを）十分に把握することの必要性を感じた”

事例 “自分が圧迫すると位置が違っていたり、力が足りなかったり未熟さを痛感したが、行っているうちにだんだんこの辺だなとわかるようになった・・・（略）・・・あんなに力が必要なのだとはじめて知った”

3) 産婦・家族とともに分娩のプロセスを共有する
 学生は、分娩期の産婦におこる変化を目の当たりにしたり、産婦やその家族とともに一緒になって変化を受け止めることで分娩の体験を分かち合っていた。まさに分娩の経過を同じ空間で産婦と一緒に体感していた。そのなかで学生が行っていたことは、「感覚の共有」「感情の伝播と共有」「行為の共有」「そばに居る：場の共有」であった。

(1) 感覚の共有

学生は産婦に手を握られたり、産婦の様子を間近で見守ることで、産み出す力や努責感のすさまじさ、子宮収縮の強さを体感していた。

事例“努責時のAさんの手を握る力はものすごく強く、私の手が折れてしまうのではないかと感じるくらいで、出産にはこんなにも強い力が必要なのだった”

事例“産婦さんは必死に努責をかけていて、見ている自分自身にも力が入るようだった”

(2) 感情の伝播と共有

学生は、産婦と空間を共にして産婦に触れていることで産みの苦しみや辛さというような産婦の感情を共有していた。

事例“(産婦さんは) 私の手を強く握って痛みに対処しようとしており、表情も辛そうで出産の辛さが身にしみて伝わってきた”

(3) 行為の共有

学生は、産婦の痛みが緩和するようにそばでサポートし、陣痛の波を共に乗り越えようとしていた。

事例“分娩第一期から産婦さんと一緒に居て、お腹が張るのを一緒に感じ、陣痛の時には一緒に頑張って呼吸して痛みを逃した”

(4) そばに居る：場の共有

学生は常に産婦のそばに居て、産婦をとりまく場の空気を体感すると共に、産婦の身体の一部に直接触れることで、気持ちを敏感に感じとろうとしていた。そして学生は、産婦に「苦痛を分かち合う存在としてそばに居る」というメッセージを非言語的に伝えていた。学生は、苦しみのなかにある対象のそばに寄り添うことの重要性を学んでいた。

事例“不安を緩和するために、対象に常に触れていることでそばに居ることを伝えたいと思った・・・(略)・・・誰かがそばに居ること、声かけを行うことは

産婦の不安緩和にとって、とても意味あることなのではないか”

事例“(私は) 緊張で声も出ない状況のときもあったが、それでも手を握って頑張っただけいい、そばに居るよという思いを必死に伝えた”

3. いのちの尊さを体感／いのちの誕生の場に存在した人々との一体感

次の段階である「いのちの尊さを体感／いのちの誕生の場に存在した人々との一体感」は、2つの内容からなる。「いのちの尊さを体感」は、学生が「いのちの誕生の感動」に全身を揺さぶられ、いのちの尊さやいのちへの感謝を身をもって体感していた。そして、「いのちの誕生の場に存在した人々との一体感」は、学生が産婦と共に存在し分娩体験を分かち合い、必死でケアを行うプロセスを経て、いつの間にか身も心も産婦の援助者の一員となっている自分に気付くという段階である。さらに、分娩の場に存在するメンバーとの「いのちの誕生をともに見守った産婦・家族・スタッフとの一体感」が生まれていた。

1) いのちの尊さを体感

(1) いのちの誕生の感動

①いのちの誕生のよろこび

学生は、無事に1つの生命がこの世に生まれて来ることができたことを、自分のことのように嬉しく感じていた。

事例“無事に産まれてきてくれたことが本当に心の底から嬉しく思い、とても感動した”

②いのちを産み出す産婦の姿に胸を打たれる

学生は、新しいいのちを産み出すために自らの生命をかけて頑張る産婦の姿に感動し、心を揺さぶられる体験をしていた。

事例“産婦さんは、本当に苦しうだけども児のために必死で頑張るお母さんの姿に心動かされるものがありました”

③いのちの尊さ・神秘

学生は、「いのちの大切さ」を実体験を通して自らの気持ちの中からわき上がるように感じていた。

事例“命の誕生の場にいらせてもらい、命の大切さを体感できたことは一番の学びである・・・(略)・・・母親は、こんなに苦労して産んだ子だから愛情もって育て

ていけるのだと感じた”

④自分の母への感謝

学生は、自らの生命をかけて子どもを産み出す産婦の姿を目の当たりにして、自分の母親の姿を重ねていた。自分を生んでくれた親に対して感謝の念を抱いていた。

事例“自分の母親もこんなに大変な思いをして私を産んでくれたのかと思うと、改めて感謝の気持ちでいっぱいになった”

2) いのちの誕生の場に存在した人々との一体感

(1) いのちの誕生をともに見守った産婦・家族・スタッフとの一体感

学生は、分娩の体験を自分のことのように思い、分娩の場に同じように存在した人たちとのつながりや連帯感を感じていた。それは、時・場所・気持ちを同じくして、皆同じ目標に向かって頑張った同志のような一体感であった。学生は、ケア提供者の一員となっていた。

事例“部屋にとっても和やかな雰囲気が流れた。その場の全員の間にいのちの誕生を共に見守り支えた一体感のようなものを感じた”

事例“(私は) Bさんや家族の方や助産師さんと共に辛い時期を乗り越えたことにより、信頼関係が急速に深まったことを実感した”

4. 産婦の援助者になれたという確かな実感

図1の右下に示す「産婦の援助者になれたという確かな実感」は、学生自身が看護援助が行えたと実感できる段階である。自分の存在や援助過程が「産婦にみとめられる」ことで、学生が「自分自身をみとめられる」ことが可能となり、「産婦にとっての看護援助を行うことができたという実感」に至っていた。

1) 産婦にとっての看護援助を行うことができたという実感

(1) 産婦にみとめられる

学生は、産婦から直接に感謝の言葉をもらい、自分の行ったことが産婦に看護援助としてみとめられた喜びを感じていた。

事例“Cさんに「ありがとうね。はじめは学生さんが立ち会うことに抵抗を感じていたけど、辛い時期にそばにいてずっと押してしてくれたから本当に安心できた」と

言ってもらえた”

事例“Aさんが、「陣痛の時に扇いでくれたり、手を握ってくれたりしてありがとう。うれしかった」と言ってくれた”

(2) 自分自身をみとめられる

学生は産婦からの評価を直接受けることによって、「産婦が必要としているケアができた」と自分の行ったケアを認められるようになり、自分が分娩の場に存在したことが産婦にとっても意味があったと感じられるようになっていた。

事例“Cさんに陣痛のとき（分娩第一期）から関わってよかった”

事例“産婦の言葉から、そばに居て患者様が必要としていたケアを行うことができて本当によかったと思った”

IV. 考察

1. 分娩立ち会い実習の必要性

母性看護学実習における学生の体験のなかでも学びの体験を分析した中西ら（2003）の研究では、学びの過程は「対象のアセスメント」「対象や看護に対する興味・関心」「解決方法のアプローチ」「援助活動の実践」「援助の効果をフィードバックすること」の5段階から構成されており、中西らの結果は看護過程展開のプロセスに類似していた。また、産婦の看護を体験した学生のレポートを分析した調査では、産痛緩和の方法のような産婦の看護に関する学び、自己の生命観や看護観の成長などが抽出されており（長島ら，2001；Ohno, 2001）、学生の感情や心の動きに焦点をあてた点では本研究と類似した結果であった。しかし、本研究の独自性は、学生の思いを中心にその体験のプロセスを記述した点である。その結果、学生は産婦に対して自分がどういう存在であるか、自己のあり方を問い続けており、分娩進行による産婦・家族・学生におこる変化、3者の関係性の深まりによって学生の気づきや理解が進むというプロセスが明らかになった。そして、そのプロセスの中で学生は、これほどまでに感情を揺さぶられ、緊張に対峙し、苦しむ人に寄り添い、援助者としての自己のあり方を真摯に問うことを行っていた。分娩期という比較的短期間のうちに「対象者の苦しみをなんとかしたい」と駆り立てられるような気持ちを抱き、対象に対するケアの達成感をダイナミックに体験していた。母性看護学実習で分娩

立ち会い実習を行う意味の大きさが再確認できた。よって、学生にとってこのような学びの機会を体験できることは、大変貴重であると考ええる。

2. 分娩立ち会い実習における指導のあり方

1) 産婦の援助者になれるかと自問しながらできる限りのことをする決意に至る（産婦との関わりの導入の時期）

(1) 学生の緊張を緩和し産婦への興味・関心を大切にする

本研究において学生は、産婦との出会いの時期に「分娩という未知の経験からくる緊張」を感じ、「産婦に対して何ができるかわからない」と戸惑っていた。多くの学生が「自分は産婦の援助者になれるか」と迷っていたと思われる。しかし、ほとんどの学生は「産婦の助けになりたい」という強い願いをもち、緊張のために引き下がりそうになるが、「やっぱり対象のために何か手助けしたい」とその願いに立ち返って対象のそばに居続けることができていた。中西ら（2003）は、対象や看護に対する興味・関心をとりあげ、学生が抱く対象に対する好意や「何とかしてあげたい」という想い、看護に対して知りたいという気持ちや責任感が、内発的動機付けとして学びの過程に影響を与え持続すると述べている。指導者は学生が持つ産婦への興味・関心を大切にし、学生の緊張を緩和しながら学生と共に対象者の全体像について話し合い、学生が抱いている対象者に関する気がかりを表出させ言語化するという支援が必要と考える。

(2) 産婦との関わりのきっかけを作る

学生は、自らが産婦の言葉や様子から関わりのきっかけをつかんだり、指導者によるケアモデルやケア参加への誘導から関わりのきっかけをつかんだりしていた。指導者と共にケアを行うことで、学生は産婦のそばへ居やすくなり、「何ができるかわからない」状態から「何ができるか探索する」状態になっていたことから、指導者は産婦と学生が関わるきっかけを作り、空間を共にする機会を意図的に設けることが重要であると考ええる。

2) 産婦にとっての看護援助を行えているかと自問しながら無我夢中でできることを行う（産婦に関わっていく時期）

(1) 産婦や家族がもつケアニーズを共に模索する

学生の記述は、産婦に対して「自分にできることを行う」であり、「産婦に対して看護ケアを行う」と表現されていなかった。よって、産婦に対する自分の行為に最初は自信がもてず、産婦に対して「自分にできることを行う」と表現されていたものと思われる。しかし、産婦のそばに居ることは学生に対象理解をもたらし、産婦のニーズにあわせて「自分にできること」を発展させ、「産婦のニーズに対応した必要な援助を模索する」状態になっていた。指導者は、分娩期ケアを行うなかで産婦や家族が求めているケアニーズについて学生と共に話し合い、必要なケアを学生が見極める手助けをし、一緒に試みていくことが大切である。

(2) 学生の五感を駆使したケアを支援する

本研究において学生は、産婦の産みの苦しみや辛さを共有する「感情の共有」、産婦の手を握ることで産みだす力や子宮収縮の強さを感じる「感覚の共有」、痛みを乗り越えるために一緒に呼吸法を行うなどの「行為の共有」、産婦と空間を共にし身体に触れることで気持ちを通わせ分娩の体験を分かち合う「場の共有」を行っていた。学生は、このように五感を駆使して無意識的にケアを行っていると考えられた。学生は「触れる」ことによって産婦の気持ちを感じとろうとし、そして「触れたり、声をかけること」で産婦を気づかう自分という存在がそばに居ることを対象に伝えようとしていた。痛みを代わりに受けることはできないが、このとき学生は、苦痛を分かち合う存在として一緒に居るというサインを産婦に発信していたのではないかと考える。このとき、学生は、産婦・家族・医療スタッフと共にいのちを産み出すという同じ目的に向かっていった。野並（2000）は、「その人を知ること」は相互にわかっていくというケアリングのプロセスであり、「知る」行為のなかの「その人に触れる」行為は相互作用をもっており、「関心を持って見ていること」が看護の対象に伝わることで、それがケアリングの行為であると述べている。学生が無意識に行っている五感を駆使したケアは、学生が独自に行える有効なケアである。指導者は学生の手をひいて誘導したり、一緒に産婦に触れるなどし、五感を使った学生の看護ケアを支援する必要がある。また、学生にとってこのようなケアリングの体験を積み重ね、人間関係

を構築していく看護の基盤となる部分が養われるものと考ええる。

(3) 産婦に行ったケアとケアがもたらした効果と一緒に意味づけする

上記で述べた、学生が行う感覚・感情・行為・場を共有するケアは、言葉として表現されにくく、産婦にもたらされたケアの効果は認識されにくい。これらのケアは、無意識的に行われていることが多いように感じる。五感を使ったこれらのケアが意識的に意図をもって行えるように、指導者は、これらのケアについて産婦の受け止め方も考慮しながら、一つ一つ学生の体験にむすびつけて意味づけをしていく必要がある。秋元ら(2004)は、学生が患者ケアを行う中で抱いた「感動」と実施したケアとの関係性を意識化させることの重要性を述べている。指導者は、実施したケアが対象にもたらした効果やその意味について学生と共に考察し、個々の対象にとって意味あるケアとして再確認していくことが重要である。

3) いのちの尊さを体感／いのちの誕生の場に存在した人々との一体感(生命誕生の時期)

(1) 感情表出や表現を支援する

学生は生命誕生の感動に心を打たれ、分娩の体験をまるで自分のことのように感じていた。分娩立ち会い実習終了後の振り返りの段階において、指導者は、学生が経験した感情の表出と言語化を支援していく必要がある。表現の場を設けることで、学生が体験した喜びや感謝の気持ち、わき上がるような感動を意味づけすることが可能になる。また、この体験を通して学生は、いのちの大切さについて言葉や表面上でなく実感として身をもって感じとり、考える機会を与えられる。また、学生自らの母性の発達を促す機会ともなりうる。これは母性看護学実習の大きな目的であり、言葉だけでなく実体験として「理解する」ことに近づくことができる。

4) 産婦の援助者になれたという確かな実感(生命誕生の後の時期)

(1) 対象からのケアの評価をフィードバックする

本研究において学生は、「あなたが居てくれて良かった、安心できた」と産婦から感謝の言葉を述べられ、学生の存在やケアに対する評価を得ていた。

その産婦からの直接の評価によって学生は、自分が行った援助が産婦にみとめられたと感じ、「必要とされていたケアが行えた」と表現していた。この段階に至るまでに学生は、「産婦に対してできることを行なう」と表現しており、自信はないものの「自分は看護ケアを行っている」というかすかな感覚を重ねていると思われた。しかし、この産婦の直接の評価によって「産婦にとっての看護ケアが行えた」ことが確かになり、「自分は産婦の援助者になれた」ことを実感することができていたのではないかと考える。中西ら(2003)は援助の効果をフィードバックできると、学生は学びを自分の中に取り込めるようになると述べている。分娩に立ち会った学生が、産婦の言葉による評価を直接受ける機会がもてるように働きかけることも指導者の重要な役割であると考ええる。

V. 結論

1. 分娩立ち会い実習における学生の体験は、「産婦の援助者になれるかと自問しながらできる限りのことをする決意に至る」「産婦にとっての看護援助を行えているかと自問しながら無我夢中でできることを行う」「いのちの尊さを体感／いのちの誕生の場に存在した人々との一体感」「産婦の援助者になれたという確かな実感」の4段階から構成されるプロセスであった。学生は、分娩期という比較的短期間であるが劇的に変化する状況下で産婦と空間を共にし、感情を揺さぶられ緊張に対峙しつつ、苦しみ産婦に寄り添い援助者としての自己のあり方を問い続けていた。そして、対象に対するケアの達成感をダイナミックに体験していた。

2. 分娩立ち会い実習における学生に対する指導のあり方は、関わりの導入の時期では、学生の緊張を緩和し学生のもつ産婦への興味・関心を重要視しながら、産婦との関わりのきっかけ作りをする。そして、学生が産婦と関わっていく時期では、産婦のケアニーズを学生と共に模索、学生が行うケアをサポートし、行ったケアとその効果について学生と共に意味づけを行う。そして、生命誕生とその後の時期では、学生の感情表出と表現を支援し、産婦からのケアの評価を学生にフィードバックすることが必要と考える。

VI. 研究の限界と今後の課題

本研究の対象は19名であり、この研究結果を一般論としてあてはめるには限界があると考ええる。今後、例数を増やして検討を重ねる必要がある。分娩立ち会い実習では、受け持ち開始時期が必ずしも分娩第一期からとは限らず、状況によっては分娩室へ移動してからということもある。また、分娩経過が途中から異常に陥ったり、想像以上に急変する場合もあり、このような状況下において学生の体験が今回と同様のプロセスをたどることは困難と考える。今後の課題として、困難事例の体験のプロセスを明らかにし、指導のあり方を検討することが必要である。

引用・参考文献

- 秋元典子、森本美智子、森恵子 (2004). 看護への動機づけを促進する臨床実習指導の方法. *Quality Nursing*, 10(8): 783-794.
- 樋口キエ子、臺有佳、若佐柳子 (2003). 在宅看護実習における学び—訪問看護実習まとめの記録分析から—. *順天堂医療短期大学紀要*, 14: 85-94.
- 川崎郷子、平野美樹子、川上久美子、佐久間久美子、渡邊富美子、金子吏子、戸田晴子、吉田光子、木津佳子、永井佳子、川上みゆき、林はるみ (2005). 母性看護学実習における学生の自己効力感を高める要因に関する研究 (第1報) —実習における学生の経験との関連—日本看護学会論文集 *看護教育*, 36: 131-133.
- 近藤厚子 (2004). 臨地実習における看護観の育ち—“困った体験”のプロセスから—. *神奈川県立保健福祉大学実践教育センター 看護教育研究集録*, 29: 87-94.
- 中西真美子、新地裕子 (2003). 母性看護学実習での学生の学びの過程—母性看護学実習を終えた学生の半構造面接調査より—. *日本助産学会誌*, 16(3): 240-241.
- 長島玲子、長廻久美子、三島みどり (2001). 産婦の看護実習における看護学生の学び—実習後のレポートの内容分析から—. *日本看護研究学会雑誌*, 24(3): 180.
- 野並葉子、森菊子 (2000). —ケアリングの実践と情報収集—患者を「知る」とはどういうことか. *看護*, 52(11): 22-26.

- Ohno,T (2001). Importance of delivery observation in education for maternal nursing. *Bulletin of Aino Gakuin*, 15: 7-16.
- 渋谷さおり、古磯祥子、大石由美子 (2005). 助産師学生の分娩介助に対する産婦の認識. *助産雑誌*, 59(1): 70-76.
- 鈴木樹里 (2004). 分娩見学実習が看護学生の分娩に対するイメージに与える影響. *神戸市看護大学短期大学部紀要*, 23: 95-100.
- Swanson, K.M.著 (1991). 小林康江、片田範子訳 (1995). ケアリングの中範囲理論の経験的な発展. *看護研究*, 28(4): 301-311.
- 白井徳子、村端真由美、橋爪永子、上本野唱子 (2003). 小児慢性病棟実習における学習内容に関する検討—実習記録の分析—. *三重県立看護大学紀要*, 7: 65-69.
- 安酸史子 (1999). 経験型実習教育の考え方. *Quality Nursing*, 5(8): 568-579.
- 山下貴美子、伏見正江、森越美香、佐野千栄子 (2005). 母性看護学臨地実習におけるケアリング経験の探求. *山梨県立看護大学短期大学部紀要*, 11(3): 35-43.

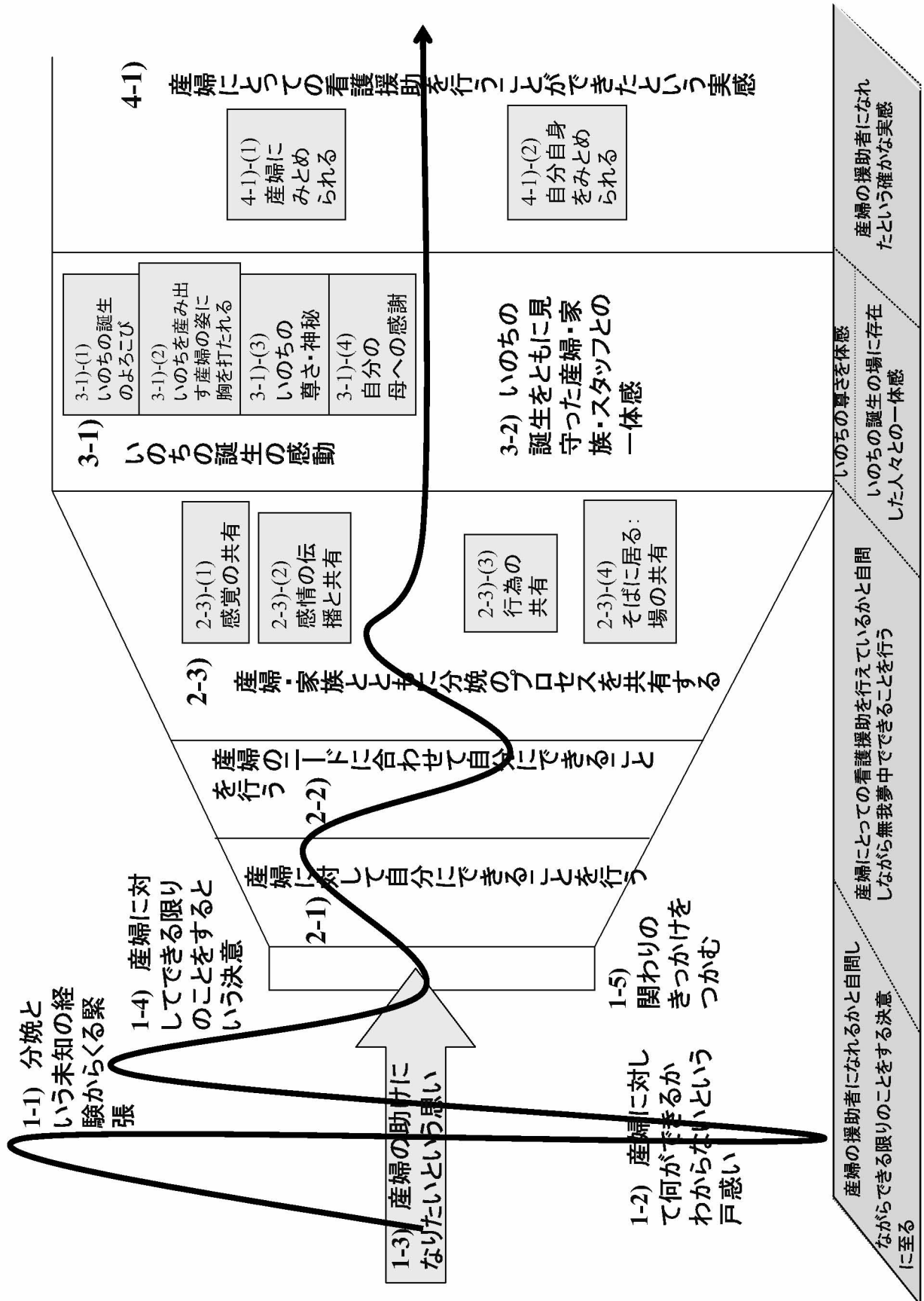


図1： 分娩立ち会い実習における学生の体験

The Process of Student Nurses Learning From Labor and Delivery Settings

KEIKO OMONISHI, YUKA OKAZAKI

*Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare Science, Okayama Prefectural University,
111 Kuboki, Soja-shi, Okayama 719-1197, Japan*

Abstract

This study was performed to clarify student experiences while being present during child delivery and to examine and enhance the teaching and learning of maternal nursing. Nineteen students who were in the delivery room during maternal nursing practice submitted written reports after practice. A qualitative analysis of the reports indicated that students followed a process of asking about being potential child-labor assistants and their ability of finding meaning in such an experience. Their thinking processes consisted of four stages: making a decision to try their best after asking if they could assist; performing whatever they could while asking if they were providing good nursing care for the woman in labor; realizing the value of life and experiences with others present at the delivery; and realizing the ability to assist a woman in labor. The findings suggest that it is necessary for the teacher to reduce student tension and put more importance on their interest in the woman in labor; to help the student find an opportunity to build nurse-patient relationships; to work together to assess the patient's health care needs; to assist the student to provide care through the five senses; to induce meaning from the care given to the patient and the outcome; to assist the student to express their feelings; and, to assist the student to receive feedback from the patient after delivery.

Keywords : maternal nursing, delivery/labor, nursing student, clinical practice, experience